

品を耽読したという点である。それと、河竹博士が問題とされた逍遙の結婚とが、何かの系絡を持ってはいないだろうか。逍遙の文芸活動がその生活態度を反映しているとするれば、之は結婚に根ざすところがあるろうし、それはまた、江戸文学好みに左右されたところがないともいえない。もっとも逍遙の草雙紙・読本の耽読は、結果として馬琴心酔となり、『小説神髓』の実践作品として、新時代文学の見本として勢い込んだであろう『当世書生気質』が、馬琴臭を脱し得ないものがあるといわれたが、そうかといって、馬琴式の品行方正作品でもない。わたくしの考え方は間違っているかも知れないが、ここに、河竹・本間両博士の二著が、二者択一を許さぬ意義の一端が見られると思うのである。

右の『小説神髓』が、明治新文学の鐘鐃であることは、文学史上の定評の通りであるが、本間博士が、これについて、源流は、外国の文学論になく、本居宣長の『玉の小櫛』であるとして、学的分析・追及を試みられた。『小説神髓』源流考』がそれであるが、『神髓』の重要な論旨は、文学は道

徳から独立すべきであるという文学独立論と、真の小説は人情の奥を穿ち、その骨髄を描破するものであって、外面的な描写を以て満足すべきでないとする写真主義論とであって、そのいづれもが、「宣長の文学論に負っていることの大きいことがわかる。」と論断されている。本間博士の新見としてすでに学界に認められているのであるが、一冊の逍遙論の中に含まれてみると、特に逍遙の真髓を伝える重要な論策として印象を新たにす。

この外、「役の行者と近代絵画」には、二者の関連について、多岐にわたって詳細に論究され、「逍遙の史的位相」には、逍

川副国基著「近代日本文学論」

標題の書は、川副さんが二十数年間にわたって、折にふれて書き綴って来られた、近代の日本の作家及び作品研究のうちで、まだ本になっていない論稿に、新に書きおろされた「ロンドンの漱石」「パリの藤村」の二篇を加えたもので、年月はおのずから

遙の人生観・芸術観が結論的に説かれているが、巻頭の「業蹟点描」は、逍遙概論として行き届いたもので、特に、史劇論と『桐一葉』、新築劇論と『新浦島』に関する論では、すべての面で、理論と実践を全うした逍遙の論技一体の面目が遺憾なく示されている。

わたくしは、森鷗外は個人として偉大な文豪であるが、逍遙は、文学史・演劇史の開拓に先駆的的使命を果たした偉大な文豪であると見ているが、本間博士が、本書において、逍遙を終始、歴史の上に置いて論攻されたことを、同感を以て感謝したいと思ふ。(松柏社刊・千代田区飯田町一の一六 定価三五〇円)

山路平四郎

なる集積をみせて、B5版・五百頁に垂んとする大著である。

痛烈な人生批判の眼を、一見飄逸な風手で包んだ川副さんの、人となりをよく承知しているわたくしは、この人の少年時代の恩師から、その昔川副さんが郷党から麒麟

児と称されていたという事実を聞いて、なるほどそうもあらうと、あらためて思ったことであるが、おそらくこの本に載せられた研究の一つ一つが、八みつ子の魂百までVというところ、きわめて鋭く、しかも真面目一途のものであらうことに疑わぬ。とはいへ、学問の対象としての近代文学については、わたくしは無知にひとしい。所詮は暢気な素人読みに過ぎぬであらうが、読んで最も面白かったのは、やはり新に書きおろしの二篇であった。

「ロンドンの漱石」は、一、ロンドン着まで。二、着英々々。三、ウエスト・ハムステッド時代。四、カンパーウエル時代。五、ツウチング時代。六、クラバム・コンモン時代。と章をわけて、その足跡をたどり、いちいち克明な現地調査に基づいて、当時の漱石の行動と心境とを、美事な浮き彫りとして捉えている。

「秋風の一人をふくや船の上」の一句を残して英国に渡った漱石である。川副さんも時にワイ談に打ち興じても、底には孤独の淋しさを湛えている人である。同じようなエトランゼとして英国に留学する、川副

さんは「ロンドンの漱石」を描きながら、つまりは「ロンドンの自己」を描いている。ところで、わたくしは思うのである。研究とか評論とかいうものは、結局その対象に対する同感と愛情とがなければ、本当にいいものは書けぬのではなからうか。そうした意味では、これと「パリの藤村」とは巻中の庄巻と称するに躊躇しない。

限られた紙幅で、どうやら、わたくしは自分の興味に引かれすぎたもの、いいをしらしいが、この五百頁の大著を通読すれば、これは御自身がそのへあとがきVで、「尾崎一雄・浅見淵・青柳優の諸氏を中心となつて編輯していた昭和十年代はじめの早稲田文学のころ、事変下の弾圧のなかで行なわれた高見順・渋川驥氏らの大正文学研究会のころ、柳田泉・稲垣達郎の両先輩にはじめて接して新しい刺激をうけはじめたころ、敗戦後の焼跡の上に建てられた早稲田茶房で高田瑞穂氏らと定期的な研究座談会を持ちはじめたころ」と述べていられるように、研究者としての川副さんの、その時々々の成長をあとづける事が出来て、同じく早稲田の風にあたって育った者として

は、ひとしをの感懐と興味とを覚えるのである。なお、便宜上その内容を列記すると、一◇「小説神髓」について。紅葉・露伴の文学とその時代。明治文学史における翻訳文学。二葉亭四迷訳「あいびき」について。徳富蘆花論。文学にあらわれた政治家。明治期の早稲田派評論家。自然主義の文学。自然主義文学の文体。自然主義文学の評論。「破戒」の瀬川丑松。「島崎藤村論」について。花袋小論。岩野泡鳴小論。正宗白鳥「何処へ」について。◇新浪漫主義の文学。永井荷風の文学と文体。◇鷗外研究文献目録。◇夏目漱石研究の手びき。「猫」について。白樺派と漱石。志賀氏の文学と潔癖さ。志賀直哉の前期短篇小説。芥川竜之介論（知性作家として）。芥川の現代小説について。林芙美子「晚菊」について。◇国文学者の在外研究。英国時代の漱石と抱月。ヨーロッパ文学散歩。ロンドンの漱石。パリの藤村。海外における日本文学研究。一という具合に、まことに多岐多端、川副さんの研究領域の広さを感じしめると共に、近代文学の研究者にとつては、恰好の参考書となるであらう。（早稲田大学出版部発行・定価五百円）